

いつものように冬

笠井 和明

ずっと一人で頑張っていた。
困っていることに気が付いた
相談できて、よかった。

これは、新宿福祉事務所に貼られている、相談を促すためのポスターのキャッチコピーである。

聞けば、外注には出さず、職員が考え、デザインしたものだと云う。

日本有数の繁華街、歌舞伎町の中にあり、長いこと、それこそ戦後の混乱期からずっと、当時は浮浪者、今はホームレスと呼ばれていた駅や公園に住みつく人々を筆頭に、落ちぶれた風俗系の人々やら、愚連隊系（今は「トーヨコ」？）の人々やら、家出少年少女やら、建築日雇の仕事につく人々やら、地方から流れ着いた訳ありの人々、そして都市雑業に就く底辺下層の労働者を、今では生活困窮者と云うのか、そんな人々を、支えつづけて来た歴史ある新宿福祉事務所の、優しい性格がとても良く出たキャッチだと思った。

知っているからこそ、共感しているからこそ、そして何とかしたいと思うからこそ、こう云う素敵で、当事者の心情に寄り添った言葉が発せられる。

私たちが新宿福祉事務所（当時は本庁舎の2階にあり、分散されたものが統合された後であったが）に足繁く通うようになってからもう28年。

その昔、野宿者問題を「経済難民」と正確に位置づけた小野田元区長。「力及ばず、あまり何も出来ず申し訳ない」と、退官時、真摯に当事者に頭を下げるほど実直な深沢元福祉部長、東京都の強制排除方針に真っ向からたたかい、排除ではなく対策だと、そのために全力を賭

してくれた武山元福祉課長、簡易旅館や宿泊施設など、とにかく一つでも良いから保護先を確保しようと、足を棒にし都内を動き回ってくれた寒竹元相談係長、そして混乱の中、現場で親身になって相談をしてくれた職員、また、職員の立場から都や国に提言を繰り返してくれた自治労の方々。

バブル崩壊後のホームレス問題発生当初、その最先端を担ったこの新宿福祉事務所は、当事者からの批判や建設的提言を真っ正面から受け止め、人道的な観点をとにもかくにも優先させながら、やるべきこと、やれることはとにかくやる。そんな、役所としては珍しいとてもア



グレッシブな事務所であった。

何も知らぬ若かりし頃の私たちは、「あーでもない、こーでもない」と、あまり建設的ではない文句やら無理難題を言い続け、とても迷惑をかけたのであるが、内心では新宿の奥深さ、この街の伝統と云うものをひしひしと感じていた。単なる空中戦の役所批判だけでは、何も生み出されないことを、新参者の私たちはここで学んだのかも知れない。

底辺を見続けている、そして、見続けざるを得ない状況、そしてその中で何かをせねばならぬ「意思」と云うものは、なかなか、そんなそこいらの役所では理解できないだろう。現場でしか分からぬ「感性」「肌感覚」と云うものは、現場の空気を知っている者以外、それは一生分からない。

それを分かったようなふりをするから物事はおかしくなる。知ったかぶりとは、もはや「悪意」の部類に入るかも知れない。

.....

まあ、それはともかく、冬である。

東京オリンピックが終わった昨年の冬は、「コロナ渦」の冬であったが、そのコロナは、感染は未だ続いているものの、ウィルスの質が変わったようで、今は「3年ぶり」のイベントが各地で開催され、「行動制限」等はほぼ解除されている。この冬「第8波」が来るだろうが、それが想定内であれば、かつてのよう大きな騒ぎにはならないであろう。

人通りが少ない新宿の街中、結構それを好んで路上生活をしていたおじさん達は、街が元に戻るとどうするのか？まあ、それはそれで何とかするのであるが、小田急百貨店本店が長い歴史の末に、ついに閉店（正確に云えばハルクに移転）し、新宿駅西口の再開発は駅ビルの解体などこれからが本番。年がら年中工事をしているのは、かつての東京駅や今の渋谷駅もそうであるが、新宿駅周辺も同じく数年がかかりのおおがかりな再開発工事が始まるようである。

新宿駅西口は安田生命ビルやスバルビルが解体されてからもう数年経つが、小田急もなくなり、超高層ビルともなれば、景色はだいぶ変わるのであろう。

私たちは、どうしても西口のバスターミナル（新宿バスタにあらず）に目が行って、あの惨劇（80年バス放火事件）と、後日再びの惨劇（98年西口地下広場火災）の上に、西口を見てしまうのであるが、その現場はどのように残るのか？まあ、再開発が終われば、そんな昔話などどうでも良いような話しになって来るのかも知れないが、新宿の歴史と云うものは、決して明るい歴史ばかり

ではない。

「レガシー」（遺産）としてどう残るかは、それを知っている、同時代に共に生きた人々にかかっているのかも知れない。

「レガシー」と云えば、その後の新宿中央公園もまた「レガシー」である。それを共に作って来たアントニオ猪木さんが、闘病生活の末、先日亡くなった。享年79歳。同世代の肉体労働者達（たいがいプロレスファン）が、群れをなし、路上生活をせざるを得なくなったことに心を痛め、少しでも励まそうと自腹で、中央公園で年末の炊き出し（最初は焼き肉で、その後、ラーメンとなり「猪木ラーメン」と親しまれた）を10年あまり続けて来た。

励ますことしか出来ない。それで良いのである。猪木から励まされたら、よほどひねくれものでなければ、同時代を生きた者は、誰しも頑張ろうと思う。それで実際、頑張っただけで路上で生きて来た仲間は大勢いる。年末に猪木を見るために頑張ろうと、そんな思いの仲間が大勢いたことを、私たちは知っている。猪木ラーメンが終了してからもう9年経つが、「猪木、死んじゃったね」と、落胆の声が今でもあがる。

その頃と比して路上で寝る人々は少なくなった。「コロナ渦」でその傾向に拍車がかかり、新宿区で実数100名を切るのも夢ではないと一時は思われたが、「コロナ渦」騒動が終われば、人の移動も再開され、再び元の数に戻りつつある（現在は新宿駅周辺だけで140名前後。周辺含めれば160名ぐらい）。どうも新宿には一定のキャパシティのようなものがあり、このくらいの数字なら問題も少なく、繁華街の中に何となく包摂してしまうようである。

と、なるとゼロにはならない。一人「脱野宿」させたり、したりしても、また一人どこからか来て、すました顔でそこに居る。そんな構造である。

そう云えば、武山元課長がその昔「新宿で路上生活をする人をなくすことなど出来やしないよ」とニヒルに笑っていたことを思い出す。ホームレスとは何かではなく、新宿とは何かと発想すれば、まあ、そう云う結論に行き着く。

と、云う訳で、私たちの活動も長き旅路となって、猪木氏が思った同年代の人々から、次の世代に代わり、脈々と新宿の底辺下層は、どこに行き着くあてもなく流れ続けていく。

まあ、同じことが「寄せ場」「宿場街」と呼ばれている地域でも、言えるのであろう。それぞれの地域でそれぞれの地域に見あった活動や運動は、それもまた同じく、時流には関係なく流れつづけていく。

世代が変わったと云うのは確かなことで、その昔、「この怠け者達めが！」と世間から侮蔑的レッテルを貼

られ続けて来た路上の人々の主流は、今や70歳前後。連絡会が出来た頃の私たちの多くの仲間も、今は生活保護か年金暮らし、入院や介護施設に入っている者も多く、鬼門に入った仲間も数え切れない。

肉体労働者や下層労働者の寿命は短い。身体を酷使すればする程、どん底を見れば見る程、その反動は、年齢と共に「病」として、じわりじわりと蝕まれていく。

その頃の人々は雲の上か、街の中に隠れてしまっているから、なかなか証言は取れない。それでも世代間で、意外と伝承みたいなのはされたりもしている。

私たちの「レガシー」は、そんなに気張って作るものでもない。そんなものがなくっても、数の変動はあったとしても、皆、それぞれの立場で、しぶとく生き抜いているその姿が、能書きではない伝承として、残っていくのであろう。

.....

そんなわけなので、この冬もまた同じことの繰り返しとなる。この、同じことの繰り返しといつも言っているが、その同じ水準を維持するのは結構大変であったりもする。

行政の対策も冬だからと云って特別なものはあまりなく、ほとんどが日常の対策の継続なのであるが、これまた、その同じ水準を維持するのは大変でもある。

冬だからと云って大騒ぎするのは、もうおしまいにしましょうと常々言って来たつもりであるが、他人への同情を基盤とする（下の階層を見て安心するのだから、しないのだから）この何だかようわからない階級社会は、年末になり、木枯らしの中、救世軍が「社会鍋」をやり出すと、借金取りが多くなり、夜逃げをする人々や生活に困ってしまう人が極端に増えるのではないかと、「昭和」の「感覚」で思い込んでいるようで、同情に値する「弱者」を探そうと躍起になる。

借金取りは夏でも春でもやっては来るし、夜逃げをするのは何も年末だけではないのであるが、吹きさらしのうら寂しい都会を何故か繁栄の裏側として演出しなければならないようである。

昭和初期の浅草のうらぶれた描写は川端康成なのであるが、大宰治も初期の小説で冬の日本橋でおちぶれたロシア人少女達が花を売り、懸命に生きる姿を短く描いている。

それは昭和恐慌の頃か、まあ、そんな姿は「貧民窟」以来、昭和の時代に珍しくもなかった。

山谷の日雇いの先輩も、年末年始は仕事がないからと役所から「餅代」をもらっても、有馬記念ですってしま

えば、財布の中はすっからかん。浅草駅で野宿をしながら越年山谷対策の「なぎさ寮」で何とか凌ぎ、年明け、また仕事。

まあ、そんな時代は、まだ仕事があった頃。バブル崩壊後は、その先輩達は失業者の群れとなって、各地に転々。冬に限らず財布の中はいつもすっからかん。貧困は冬だけではなくなった。役所が開いているようが、いまいが、いつも困窮。木枯らしは年がら年中、吹きまくる。

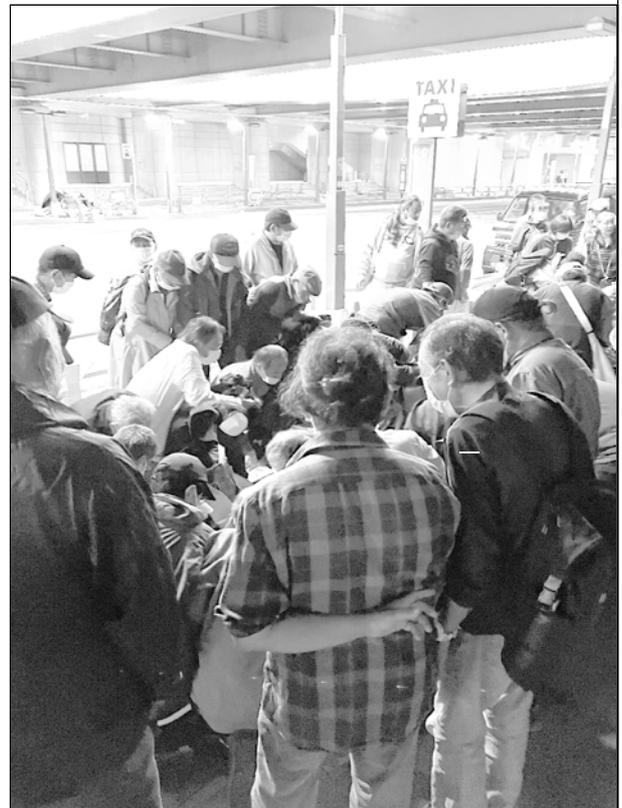
まあ、それでも、冬は私たちにとって特別な季節であることには変わりない。

冬のたたかいは、「凍死」をさせないこと、「孤立」の果ての「野たれ死」をさせないことである。

対策の視点から云えば、「医療問題」とも言えるし、運動の指点から云えば「団結問題」とも言える。民間の側からすれば、行政が提供できない物資を、いかに路上に投入できるかの問題でもあり、こう云う隙間で活動する私たちからすれば、面目躍如の時期でもある。

行政に何でもやれという、過度な期待なんだか、そんな声も多い。が、役所は毛布や寝袋や食料を直接路上に提供することも出来ない。それをすると商店街などから野宿者を固定化させるのかと怒られる。なので民間を通してこっそりとやる。

役所を批判する前に、私たちで出来ることは私たちでもやる。必要なものは必要である。そこは「共助」の部分である。私たちは「いけない」か「いけなくないか」などとは関係なく、目の前の現実からスタートし、そこ



で必要なものがあれば、それはそれで、それが可能であればやってしまう。結果、どうなるかは、人の運命なので、それは分かりはしない。

私たちは、私たちが出来る限りではあり、それが満点でなかろうとも、その限りで、物資を運び、食を運び、可能な限りでいつもの越冬をやるだけである。それは「路上生活、やめませんか？」と云うような、阿呆なキャッチではなく、「仲間のいのちは仲間を守る」と云う、昔ながらの、そしておそらく本質であろう、そう云う言葉でこの活動は語られることであろう。

私たちがそんなことを学んだのは、若かりし頃の山谷や「寄せ場」での活動であるが、その山谷の支援から、派生したのかしていないのか、劇団「水族館劇場」の桃山邑さんも、先日、闘病の末亡くなった。享年65歳。猪木氏の世代からすれば、ひとつ下の世代でもある。

「さすらい姉妹」と云うユニットで「寄せ場」を巡礼し、路上の見せ物興業を披露し続けて来た彼、彼女らが新宿の第一回越冬闘争（1994-95）に登場した頃の熱気と、皆の驚きが思い出される。それ以降、新宿の越冬には、桃山氏が率いる劇団が悲喜交々の物語を紡いでくれた。おっちゃん達もそれが好きで、ゴザ敷いて、酒を飲みながら一緒に笑い、一緒に歌ったものである。

「藝能」は、モニターに映し出されるものではなく、目の前で興業されると、一体性のお祭りのようで、いつしか、その地域の日常になったりする。それは興ったり、廃れたりしながら、場所は変われど底辺に居残り続ける。それが望みだったかの、それとも祈りだったのかは分からぬが、都市は、下層は、こうでなければいけぬとの強い「意思」が、彼の死からは聞こえて来る。

とても残念な死である…。

社会の底辺で作られて来たものは、それはそれで何となく誰かに引き継がれ、そこの立場の人々の、仲間の、血となり肉となる。

日常の活動の中に冬のヒントと云うものはいつも隠されている。冬だからと、騒ぐのではなく、日常的に何をやっているのかがそれは問われている。

逆に言えば、日常を共にせず、冬だけ何かをしようとしても、それは当事者にとってみればあまり魅力を感じない。

まあ、活動と言ってもすでにある意味確立しているものをいろいろとバリエーションを変え、やっているにすぎない。仲間作りはきっかけであり、共同作業であり、仕事でありと、同じ立場の人々が一緒になにかをやることが大事であったりする。ただそれだけかも知れない。

.....

6月のとある日、アルミ缶を集め、戸山公園で長いこと生活をしてきた酒飲みのおっちゃんが動けなくなった。管理事務所も、私たちが病院に行くことを勧め、救急車を呼ぼうとしたが本人は頑なにそれを拒んだ。いやいやこのまま死んでしまうぞと、いろいろと計画と段取りを進めようとした矢先、周りの仲間が、アルミ缶の台車の上に泥だらけのおっちゃんを乗せ、2キロ近くはあるだろうか、人通りの多い明治通りをえっちらえっちらと南下し、新宿福祉事務所に「どうにかしてくれ！」と駆け込んだ。よほど切羽つまってのことだろうし、本人も仲間がそこまでやってくれるならと応じたのかも知れない。

福祉事務所も、これは一大事と職員総出でシャワーを浴びさせ、着替えもしてくれ、福祉や入院の手続きをしながら救急車を呼び、彼は一命を取り留めた。

台車で送る方も送る方であるが、それを疑問なく受け入れるのも、また新宿福祉事務所らしい。

こと新宿では、当事者と新宿福祉の関係はそう云う関係でもある。

いつも酒ばかりを飲んでいて、地域の人々から煙たがられていても、ちゃんと仲間は居る。相談できて良かったのではなく、仲間がいて、心配してくれる人がいて、福祉も親身になってくれ、本当に良かった。である。

彼も一人で頑張ってきた。そして、こんなことがあったからこそ、自分の立場に気が付いたのかも知れない。まあ、そんなものである。

その明治通りを散歩がてら歩いていけば、かつて新宿駅で共に暮らしていた仲間が、地元の高齢者よろしく何気なく歩いてくる。と、云うかもやほ地元の高齢者であり、福祉やら介護やら、地域サービスを受けながら何気なく暮らしている。

今はマスクの時代、声をかけあうことは控え、お互い顔が分からなかったふりをして、そっとうなずきながら素通りする。

「やあ元気かい？」「おお、元気だよ」と、目で会話しながら。

生き抜くことにこだわる新宿の越冬になるだろう。

(了)

巡回パトロール おにパト報告

仲間が寝ている場所を訪問し、おにぎり渡したり、相談に乗ったりする巡回（パトロール）活動は連絡会の日常的な活動で、休みなく毎週日曜日、毎週水曜日に実施しています。日曜日は都庁下に集まり、衣類配布も同時に行っています。また、シャワーサービスも通年で実施しております。

新宿ではまだまだ多くの仲間が路上で暮らしています。ちょっとした支援ですが、それが必要となります。

おにぎり巡回パトロール 3-6月実績

		都庁	西	公園	東	小計		周辺部	戸山地区	合計	
							(前年同月比)				(前年同月比)
2022	7月3日	40	15	14	49	118					
	7月10日	49	14	14	45	122					
	7月17日	55	19	16	42	132					
	7月24日	52	22	16	53	143					
	7月31日	42	15	18	36	111					
	7月平均	48	17	16	45	125 (▲18)	9	8	142 (▲22)		
	8月7日	51	16	13	45	125					
	8月14日	35	19	15	36	105					
	8月21日	66	17	14	43	140					
	8月28日	37	16	19	41	113					
	8月平均	47	17	15	41	121 (▲37)	9	9	139 (▲38)		
	9月4日	54	22	16	45	137					
	9月11日	50	16	18	43	127					
	9月18日	49	16	16	42	123					
	9月25日	51	20	17	47	135					
	9月平均	51	53	53	53	131 (▲26)	10	10	151 (▲26)		
	10月2日	53	21	19	44	137					
	10月9日	60	14	19	44	137					
	10月16日	48	23	19	38	128					
	10月23日	50	22	9	21	102					
10月30日	50	22	24	39	135						
10月平均	52	20	18	37	128 (▲25)	11	10	149 (▲22)			
									4ヶ月平均	145 (▲27)	

深夜巡回（パトロール/軽食配布、毛布配布9月より）活動で出会った仲間の数

2022年											
日時	天候	4号街路	都庁	公園周辺	西口地下	西口地上	御苑	東	大ガード	新南口	深夜計
7/10-11深夜	晴	20	27	7	41	20	2	2	10	17	146
7/24-25深夜	晴	20	28	6	39	22	1	3	4	20	143
8/14-15深夜	晴	17	29	7	35	17	2	1	10	20	138
8/22-23深夜	晴	16	25	5	40	17	1	3	7	17	131
9/11-12深夜	曇	21	32	6	38	23	2	1	4	18	145
9/25-26深夜	晴	24	28	7	39	19	2	1	5	21	146
10/9-10深夜	雨	19	30	5	50	15	1	4	3	22	149
6/26-27深夜	晴	22	32	8	50	10	1	5	3	17	148
									平均	143名	前年比▲14名

シン・夏まつり 開催

久しぶりの公園での夏祭り。

オリンピックが終わり、コロナ渦が終われば、どこでも何でも出来る、まあ、そんなところである。

夏祭りと言っても、盆の時期、慰霊祭を中心にした夏祭り。その中心は亡くなった仲間の祭壇。多くの仲間がこの地から去っても、その後輩達が後へ続けとばかりに集まって来る。先輩達の思いを胸に、なんとかこの街でやっていこうと思う。

今年は浅草の方で活動をされているお坊さんの吉水さん達が来て下さり、念仏をあげてくださった。忘れず、年末になると寝袋などを配って下さる吉水さん達。感謝である。

炊出しは、本邦初公開の「冷やし中華」。出来あいのものではなく、材料から買い集め、前日から仕込みを開始しながら、手作りで皆で作ったもの。冬は暖かいもの、夏は冷たいもの。それが炊出しの基本。皆で作った150食があつと云う間に完売。

その後は、発泡酒と日本酒の振る舞い酒。こんな日こ

そ、酔わなければやってられない。あちらの世界の仲間と共、語り合う、まあまあはちゃめちゃであるが、これが新宿の、筋書きがなく、能書きもない夏祭り。

まあまあ、今年は特別に暑い夏、少しは納涼になったようである。



いろりん村 収穫祭

原料から皆で、切り込んだり、炊き込んだり、煮込んだりと、その過程を仲間の力ですることによって、おにぎりだろうが、弁当であろうが、成り立っています。決して弁当をどこかで買って済ますような手抜きを致しません。食材を作られた、そして送ってくださって方々への敬意を忘れず、心をこめて炊出しにしております。

10月の10日から「いろりん村稲刈り体験ツアー」なるものを企画し、準備し、先発隊、後発隊含め13名の仲間がいろりん村に到着しました。

先発隊が到着した頃は天気も良く、春先に皆で植えた稲の発育も良く、稲刈りは地元の方々によって既に済まされ、「はぜかけ」など、その後片づけであるとか、いろりん村周辺の耕作やらの仕事を手伝い、後発隊の仕事はほとんどなく、後発隊は体験ツアーのようなものになり、いろりん村の村長さんでもある木暮さんの話を聞き、来年はどうするかとか、まあまあばちばちやろうとそんな話になり、そのまま近くの温泉宿で「収穫祭」なるものが開催され、地元の方々と皆で和気あいあいと交流をしました。

どうしても経済活動に話が向かいがちですが、お互いボランティア。気持ちの交流を最優先にしながら、出来ることをお互いをしていくことが基本であると、話は一致しました。

農家の方々との交流、皆で作り上げた、「いろりん村」。そこを大事にしながら内にこもるのではなく、外洋に常に向かっていく連絡会でありたいと、そんな勝手な夢想ばかりで、現地にはご迷惑ばかりをかけていますが、今後とも宜しくお願い致します。



2022～2023 いつものようであるようなないような

新宿越年越冬

2022年12月25日（日）～2023年1月4日（水）

12月25日（日） おにぎり&毛布配布パトロール 午後4時半（都庁下集合）
12月26日（月） 福祉行動 午前9時より（新宿福祉事務所）

★年末年始は新宿中央公園「水の広場」午後2時～18時に常時常駐

※雨天は都庁下にて

12月29日（木） 相談会、衣類、毛布配布、越年炊出し、パトロール（夜間）
12月30日（金） 相談会、衣類、毛布配布、越年炊出し
12月31日（土） 相談会、衣類、毛布配布、越年炊出し、パトロール等（夜間）
1月1日（日） 相談会、衣類、毛布配布、越年炊出し
1月2日（月） 相談会、衣類、毛布配布、越年炊出し、パトロール（夜間）
1月3日（火） 相談会、衣類、毛布配布、越年炊出し、
1月4日（水） 福祉行動 午前9時より（新宿福祉事務所）

新宿連絡会 090-3818-3450

新宿連絡会 会計報告

今期も全国から多くの方々からの支援を頂きました。ありがとうございます。

毛布、お米、衣類、事務所では山のようになっており、週に一度、仲間で仕分け作業をして、車に乗せ、配布場所まで持参しております。

食材も「山谷農場」を始め、各地の方々から頂き、おにぎりや宿泊者への食事提供などに余すことなく使い切っています。

現金は諸活動費の他、「いろりん村」への作業にかかる活動経費にも使わせて頂きました。

越年越冬もまた多くの支出、物資提供が見込まれます。引き続きのご支援、宜しくお願い致します。

2022年度 7月～10月新宿連絡会収支報告

勘定科目	金額	勘定科目	金額
I 計上収入の部		2 管理費	
1 寄付金収入	1,280,250	旅費交通費	51,980
計上収入合計	1,780,250	通信費	97,166
II 計上支出の部		消耗品費	42,886
1 事業費		事務用品費	72,595
おにぎり/炊出し事業	150,181	事務所費分担金	120,000
巡回活動費	196,688	衛生管理費	0
農業支援事業費	360,143	支払手数料	29,276
その他活動事業	73,360	車両費	182,956
夏まつり事業	226,315	修繕費	0
		計上支出合計	1,603,546
		計上収支差額	△323,296
		前期収支差額	379,500
		次期繰越金	56,204

●活動カンパ 振込は 郵便振替口座00160-6-190947「新宿連絡会」まで。

●郵便物、物資カンパの送付先は以下の住所にお願いします

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-6-10関ビル106号 新宿連絡会 宛てでお願いします。